

飯能市におけるエコツアー実施団体及び住民参加の継続性に関する研究

A Study on the Continuity of Ecotourism Organizations and Citizen Participation in Hanno City

張 新語
ZHANG Xinyu

1. 序論

(1) 背景

エコツーリズムは 1980 年代初頭に提唱された観光形態の一つで、1990 年代から特に日本で注目を集めるようになった。マスツーリズムに代表される従来型観光の反対概念と紹介されることが多く、環境保全と地域発展の両立を目指しており、多くの地区で推進されている(敷田,2001)。

日本では、1991 年に環境庁(当時)がエコツーリズム推進のために検討調査を始め、1993 年の白神山地と屋久島の世界自然遺産登録を契機として、国立公園地域など自然度の高い地域などにおいて、エコツアーを実施する事業者が見られるようになった(環境省,2011)。2004 年に、環境省がエコツーリズムの定義を歴史と文化に広げ、13 地域をエコツーリズム推進モデル事業のモデル地区として選定した(事業は 2006 年まで)。そして、2008 年「エコツーリズム推進法」の発効により、エコツーリズムは多くの報道とニュースに取り上げられ、地域づくりの手段として取り組み始めた自治体も 2008 年前に著しく増えた(高梨ら, 2008)。

日本でエコツーリズムが推進されて以来、地域の活性化と地域の持続的な発展における効果が大きく期待されている。敷田(2008)はエコツーリズムを推進することで、地域が観光システムを主体的にデザインでき、自律的な観光として持続可能な地域づくりに繋がれると述べている。海津(2016)もエコツーリズム推進モデル事業を機に、里地里山地域や観光地などもエコツーリズムが展開され、自然環境保全よりも地域振興方策としての期待が高まっていると指摘した。このように、エコツーリズムの継続で期待される効果に関しては研究されたが、事例研究は事業紹介に留まる傾向があり、具体的に地域でエコツーリズムの仕組みがどのように維持され、どのように地域振興に効果があるかなどを検証した研究

は少ない。近年では、エコツーリズムの効果を議論する事例研究は見られるが、例えば、山田ら(2016)は社会ネットワーク分析法を用いて、三重県鳥羽市でエコツアーの実施によって、地域の人々の関連が強化されたことを検証した、地域においてのエコツーリズム仕組みを持続させる手法、特に長期間でエコツーリズムに取り組んでいる地域において、地域が仕組みを継続する取り組みやエコツーリズムが地域に発揮している効果はまだ不明確で、事例研究もまだ少ない。

(2) 目的

本研究の目的は、地域振興や観光振興を期待して、エコツーリズムを継続的に実践してきた地域を事例に、エコツーリズムを運営する方法とエコツアー実施団体の変遷、エコツアー実施団体の構成員である住民の意識を明らかにすることで、エコツーリズムを継続するための要因を考察することである。

(3) 研究地の選定と紹介

2004 年に、環境省がエコツーリズム推進モデル事業を始め、3 つのカテゴリで推進モデル地区の選定を行った。そのうち、カテゴリー3 として分類された「里地里山地域」に多数の自治体からの応募があったことで、(全 55 件のうちに 34 件の応募)、日本におけるエコツーリズムが地域との関わりにおいて各地で受け入れられていることが裏付けられた(海津,2016)。そして、最終的に選定された 13 地区の中に、「飯能・名栗地区」、「田尻地区」、「飯田地区」、「南紀・熊野地区」と「湖西地区」の 5 地域が「里地里山地域」として選定された。2006 年に事業が終わると、エコツーリズムの担当部署が吸収合併されたり、選定当時の取り組みが他の事業に統合されたりする地区が多かった。しかし、飯能市はモデル事業選定当時に取り組んだ仕組みを基盤に継続し、2018 年まで 14 年間もエコツアーを開催している。そのため、飯能市のエコツーリズムは、継続性に関

する要因を検討する対象地として適していると考えられる。

埼玉県南西部に位置している飯能市(図 1)は、東部から西部まで関東平野と秩父山地を渡って、市内の7割は山野である。面積は 193.05 km²で、人口は約 8 万人である。市域の約 76%を森林が占めていて、2005 年に、まちづくりに林業を取り入れ、「森林文化都市」を宣言した。同年で、飯能市と名栗村が合併した。飯能市は天覧山などの山、名栗湖などのダム湖もある(図 2)。また、飯能祭り、獅子舞などの文楽活動があつて、2019 年はムーミンのテーマパークを開設する予定である。毎年ハイキングやレクリエーションにきた観光客は約 250 万人である(平井, 2013)。エコツアーとしては、当地の自然、文化、伝統産業と建築などの要素を用いて、飯能市全域でツアーを開催している。



図 1：飯能市の位置

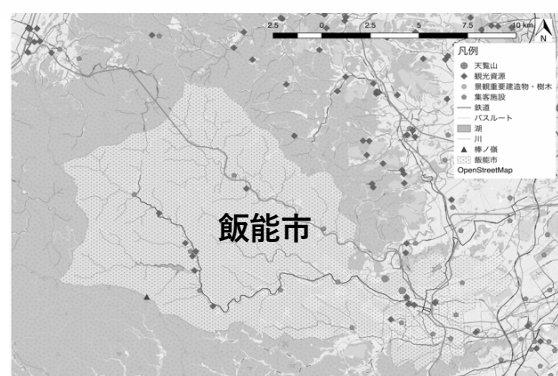


図 2：飯能市の観光資源

(4) 研究方法

本研究は、長期的に飯能市の仕組みとエコツアー実施者の継続状況を把握するため、仕組みの運営を担当している飯能市エコツーリズム推進課及びエコツアー実施者のツアー実施状況を記載している飯能市エコツーリズム推進業務報告書などを用い、ヒヤリング調査、文献調査、アンケート調査を行った。

まずは飯能市エコツーリズム推進課の職員に対して、運営の仕組みをヒヤリング調査し、継続における課題を明らかにした。その後は、「飯能エコツーリ

ズム推進事業業務報告書」とエコツアーパンフレットを用いた実施団体に対する文献調査と、飯能市エコツアー実施団体「エコツーリズム市民ガイドの会」の会員へのアンケート調査を実施した。

2. 飯能市エコツーリズム運営の仕組み

(1) 調査方法

2018 年に 10 回の飯能市でのインターンシップを機に、飯能市エコツーリズム推進課全 3 名の職員のうち、2 名(課長 1 名; 推進課で 6 年間務めている 1 名)にヒヤリング調査を行った(表 1)。ヒヤリング内容は 2 名の職員の就職履歴、飯能市がエコツーリズムを推進された経緯、エコツーリズムに対する期待と感じた効果、今の課題とエコツアー実施団体の情報などがある。

表 1：ヒヤリング対象

	年齢	就職経歴
A さん	40 代	民間企業 2 年、飯能市役所他部門 15 年、推進課 2 年(課長)
B さん	30 代	推進課 6 年

(2) 結果

(i) 飯能市エコツーリズムを推進する時期区分

I 期：推進モデル事業期(2004-2006)：飯能市はこの間に推進モデル地区に選定され、国のサポートを受けながら、エコツーリズムを推進した時期である。

II 期：仕組みの構築期(2007-2014)：2007 年から、飯能市は独自にエコツーリズムを運営し、制度及び関わっている組織を改善し、仕組みを構築する時期である。

III 期：仕組みの安定期(2015～)：2015 年エコツーリズム推進全体構想の再認定を機に、エコツーリズムの推進計画も更新し、仕組み全体が安定している時期となっている。

(ii) 飯能市エコツーリズムの運営

仕組みの運営は主に飯能市エコツーリズム推進課、飯能市エコツーリズム推進協議会とエコツアー実施者という 3 つの組織が関わっていて、継続に重要な仕組みが明らかになった。全体の運営は 2 つの仕組みに分けられ(図 3)、まずは①エコツアーガイドを養成する仕組みである。飯能市エコツーリズム推進協議会は毎年エコツアーガイド養成講座を開き、エコツーリズム推進課を通して住民に開催状況を発信する。そして参加意欲のある住民は推進課に申込み、講座の課程を全部受講するとエコツアーガイドとし

て活動できる。この仕組みは2005年から始まり、飯能市が住民を新規エコツアーガイドに養成し続ける仕組みである。

もう1つは②行政のエコツアーの実施に対して支援する仕組みである。飯能市は新規のエコツアー実施者に対して、初回にエコツアーを実施する時に6万円の補助金を交付する交付金制度と、企画された全てのツアーの内容を審議する事前協議制度がある。これらの制度は、エコツアー実施者の金銭的負担や知識や技術の不安などを解消し、実施者が継続的にエコツアーを実施できる仕組みとなっている。

この2つの仕組みを含めているエコツーリズムの運営で、住民がエコツアーガイドとして継続的に活動でき、全体の枠組みが継続されてきた。

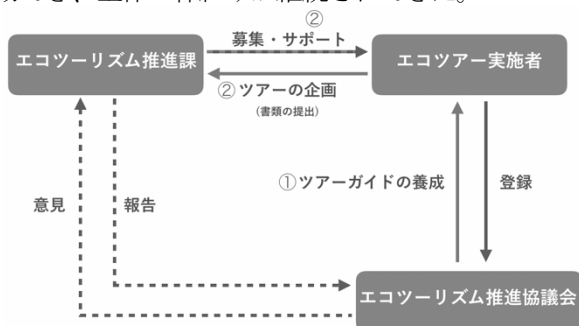


図3：飯能市エコツーリズムの運営

(iii) 飯能市エコツーリズムの仕組みにおける課題
ヒヤリング調査によると、飯能市エコツーリズムは2004年に成り立った仕組みを基盤に、現在までに継続してきたことを確認できた。そして、飯能市としてエコツーリズムの推進に、地域づくりと観光振興の機能を期待しているが、具体的な効果を数値として表現することは難しいとしている。また、ツアー実施者の高齢化が深刻な問題で、さらに実施者同士の交流があまり見られないために、今後の仕組みの継続は難しくなると考えていることが分かった。

3. 飯能市におけるエコツアー実施団体の継続性

(1) 調査方法

飯能市が毎年「飯能市エコツーリズム推進事業報告書」(以下、報告書と記す)を作成している。報告書に記載しているエコツアーを実施した団体とエコツアーを対象に、2004-2016年のエコツアー実施団体名とエコツアータイトルを抽出し、年度毎にエコツアーを実施された回数を集計し、団体の継続状況を把握した。

(2) 結果

ツアー実施回数の推移を見ると、2004年から2016年までの12年間で、飯能市では92団体(個人も含む)のエコツアー実施者がのべ1,109回のツアーを開催した。そして、エコツアー回数もツアー実施者数も、毎年増加する傾向が示された(図4)。

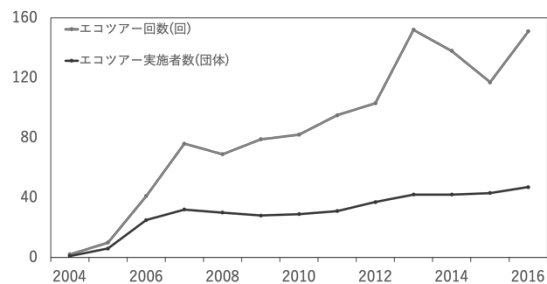


図4：飯能市エコツアー数と実施者数の推移

エコツアー実施団体の継続年数からみると、継続期間が3年以下の団体が一番多く、50団体がある。10年以上の団体は10団体があって、7年以上継続した団体は全体の25%を占めている。

ツアーの実施回数では、継続期間10年以上の10団体は481回ツアーを実施して、ツアー数全体の43%を占めている。さらに、10団体のうち、「市民ガイドの会」という団体が実施したツアーは最も多く、286回ツアーを実施し、他の9団体の合計数より多いことがわかった。しかも、他の団体が平均年に2、3回ツアーを実施しているのに対して、「市民ガイドの会」は年間10回~30回ツアーを実施している。故に、「市民ガイドの会」は仕組みを推進する時の中核的組織と判断できる(図5)。

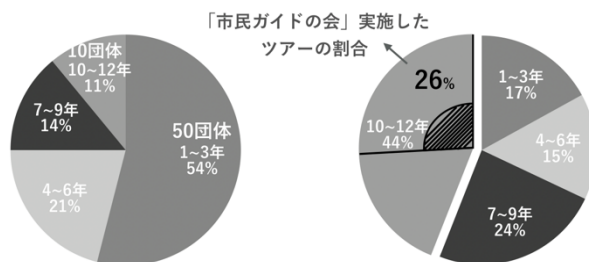


図5：継続年数別の実施団体数とエコツアー回数

また、毎年エコツアー実施団体の変動から見ると、2006年からは平均30団体がエコツアーを実施している(表2)。うちに、年平均7団体が新規団体として活動に参加し、年平均23団体が前年度から継続してエコツアーを実施している。また、年平均5団体はエコツアーを中止している。そこで、団体の継続年数及び継続状況から見ると、飯能市で活動しているエコツアー実施団体はA：長期間に継続している団体；B：エコツアーを中止し、また再開した団

体；C：エコツアーを中止した団体；D：新規参加した団体という4タイプに分けられる。

表2：毎年度実施団体数の変動

実施者数	新規	継続	中止*	活動している団体
2004年	1	0	0	1
2005年	5	0	1	6
2006年	20	5	1	25
2007年	13	19	6	32
2008年	3	27	6	30
2009年	3	25	6	28
2010年	5	24	6	29
2011年	3	28	2	31
2012年	9	26	7	35
2013年	7	34	5	41
2014年	7	35	6	42
2015年	6	36	11	42
2016年	8	39	6	47
平均	7	23	5	30

エコツアー実施団体の状況から、多数のエコツアー団体が存在していることが分かった。そして、団体の継続年数からみると、図6に示すように飯能市のエコツーリズムは少数団体の継続的な活動と多数団体の入れ替えでエコツアーを実施することで、飯能市全体としてエコツアーが継続してきたことが明らかになった。

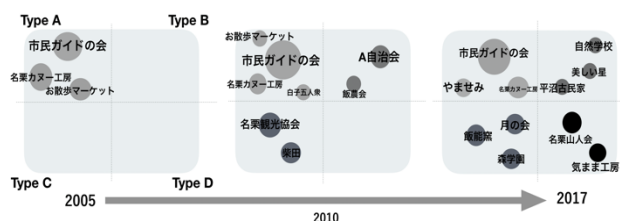


図6：飯能市エコツアー実施団体の継続

4. 飯能市における住民参加の継続性

（1）調査方法

飯能市の中核的エコツアー実施団体「市民ガイドの会」は、推進課が運営に関わっていて、エコツアー実施団体の中で規模の一番大きい組織であり、飯能市の住民がエコツアーガイドとして活動している主な場でもある。そこで、飯能市住民参加の継続性と住民から感じている仕組みに対する価値を把握するため、2018年10月に実際に活動している30名の会員を対象にアンケート調査を行なった。アンケートの内容は主に、会員の基本属性、入会前の活動、入会した経緯、入会後の活動と今後の展開などの項目である。webアンケートと紙アンケート両方を利用し、会の代表者を通して、会員に配り、25通の回答を回収した。

（2）結果

14年間の会員の飯能市エコツーリズムに対する意思の継続と違いを見るため、仕組みの時期区分をもとに、入会時期で会員を3期に分け、特徴を見た。

表3：会員の時期区分

タイプ	入会年	人数	合計
I期	2005	4	4(16%)
II期	2007	1	9(36%)
	2010	2	
	2012	1	
	2013	2	
	2014	3	
III期	2015	5	12(48%)
	2016	7	

特に違いが見られた項目は、①会員に入会した理由；②エコツアーガイドを始めた動機；③エコツアーを実施する頻度；④勉強会の参加する頻度；⑤エコツアーをやってよかった；と⑥他団体への所属の有無という6項目である。

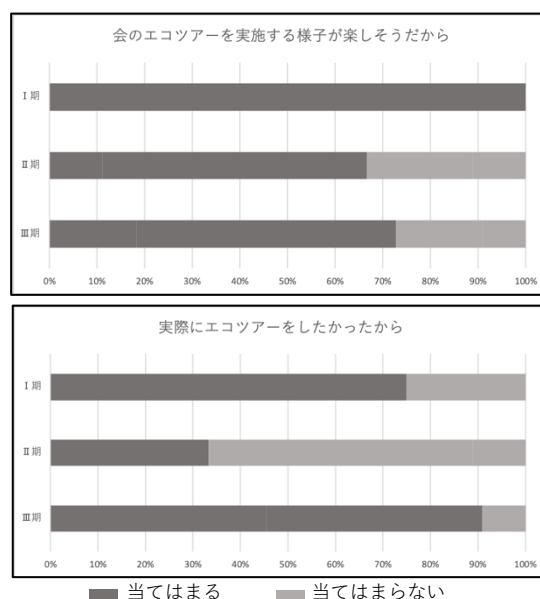


図12：会員の入会理由

会員の入会理由について(図12)、I期つまり長期間に活動している会員は「会のエコツアーを実施する様子が楽しそうだから」という項目に肯定的回答が多く、III期つまり活動時間の短い会員は「実際にエコツアーをしたかった」という項目に肯定的回答が多い。

そして、エコツアーガイドを始めた動機について、「地域づくりに関心があるから」、「人との関わりが好き」、「歴史、文化に関する知識を高めたかったから」と「観光業の振興」の項目について、I期の会員は圧倒的に「当てはまる」と多く回答しているに対して、II、III期の会員の当てはまらない人もいる(図13)。

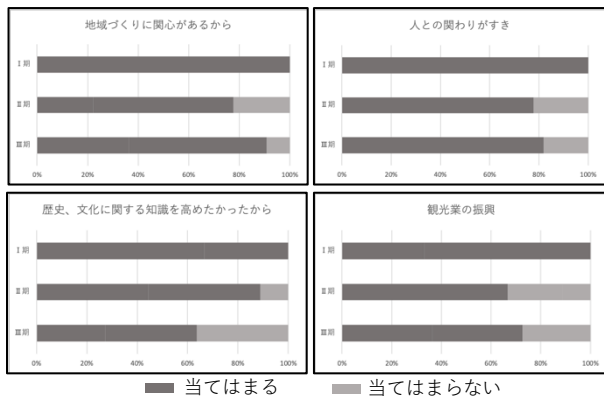


図 13: エコツアーガイドを始めた動機

エコツアーガイドを始めた動機では、長期的に活動している会員は地域への関心度が高く、自然に限らず地域全般の知識を重視している傾向が見られる。

また、会員のエコツアーの自習勉強会への参加する頻度とエコツアーガイドをやる頻度を見れば、I 期の会員は勉強会への参加する時間が少ないが、エコツアーを実施する頻度が高く、III 期の会員は勉強会を積極的に参加しているにも関わらず、エコツアーを実施する頻度が低く、約 30% の会員はエコツアーを実施していない状況となっている(図 14)。

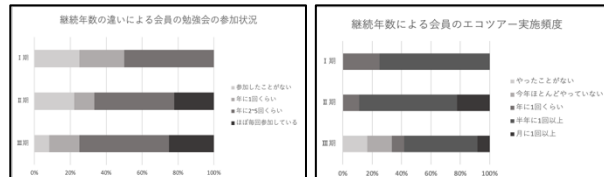


図 14: 会員の勉強会へ参加する頻度とエコツアーを実施する頻度

長期的に活動している会員は比較的に活躍している一方、新入会員は十分に活動していない可能性が示された。

続いて、会員のエコツアーをやってよかったことに関しては、長期的に活動している会員は会で人との交流を重視し、観光業への貢献度が高く、収益に対することも満足度も高い傾向が見られた(図 15)。

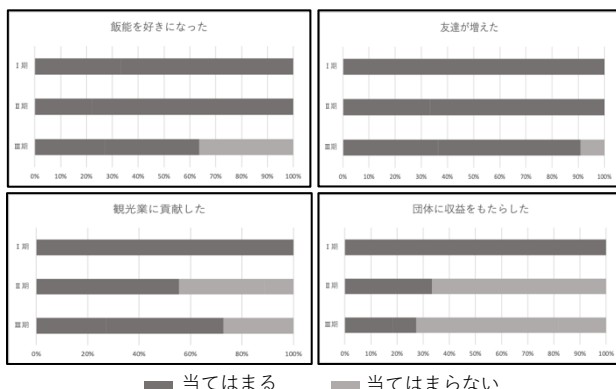


図 15: 会員のエコツアーをやってよかったこと

最後に、会員の他団体への所属する状況を見ると、I 期の会員は基本的に他団体に所属していて、II、III 期の会員は他団体に所属している人が少ないことから、長期的に活動している会員は他の実施団体との交流が多いことが明らかになった(図 16)。

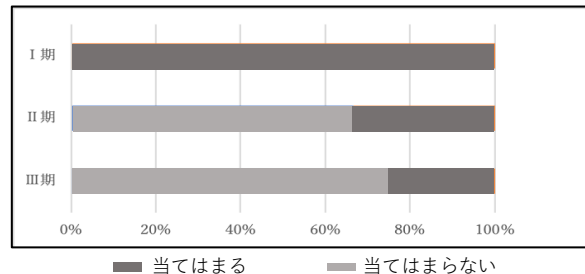


図 16: 他団体への所属の有無

飯能市で長期的に活動している会員の特徴から、エコツアーガイドとして継続的に活動する住民の特徴として、①多実施団体との交流および共同にエコツアーを実施することが多いこと；②地域への貢献意識が高いこと；③自然知識に限らず、地域全般に対する興味を有していること；④団体の経営を重視するといった要素が挙げられた。

5. まとめ

飯能市エコツーリズムは、新規ガイド及びエコツアーの実施をサポートできる行政の関わり、少数の継続年数の長い団体と多数の継続年数の短い団体の組み合わせ、地域への関心度の高く、団体の経営も重視している住民によって、14 年間という長期に継続することができたという点が明らかになった。

6. 考察と提言

(1) 行政の関わり方

飯能市エコツーリズム推進課は仕組み全体の運営、情報の発信、実施団体との連絡や中核団体「市民ガイドの会」の運営などの業務を担当し、仕組みの継続を維持することに大きな役割を果たしている。一方で、エコツアーに関する書類の処理、エコツアー実施団体と推進協議会への対応または他地区から視察の依頼などの庶務は全部推進課が担当し、行政への負担が大きくなっている。この問題について、平井(2013)はエコツアー実施団体特に「市民ガイドの会」の作用を発揮し、行政と連携して、エコツアーに関する全般の業務を分担するという提案が論じされた。

また、推進課は中核団体「市民ガイドの会」の運営を管理し、団体の継続は行政のサポートと深く関

わっていることになり、住民が主導性を失う可能性もある。しかし、ヒヤリング調査から、2017年に推進課は「市民ガイドの会」を独立させ、会の運営は会員独自で担当するようになった。飯能市としては会を自主的な組織にし、住民の主導性を強めるとともに、推進課の業務を減らすことを期待している。

(2) エコツアー実施団体の継続

飯能市エコツアーの実施は少数の継続年数の長い団体、特に「市民ガイドの会」の活動と、多数の継続年数の短い団体の入れ替えて継続してきた。ヒヤリング調査によると、エコツアーを中止した団体のやめた理由は①年齢；②エコツアーの審査が大変という2つの理由が挙げられた。また、平井(2018)と中岡(2018)によると、エコツアーの収益が少ないことも団体のやめた理由と挙げられている。飯能市では半分以上の団体の継続年数が1~3年程短く、これらの理由でやめる団体が多くなり、新規団体が少なくなると、飯能市全体としても今後の継続が難しくなる可能性が考えられる。そこで、エコツアーを実施する手続きをシンプルにし、新規の実施団体を増やしたり、継続できなかった団体を継続させたりすることが提案できる。

また、「市民ガイドの会」1つの団体で飯能市約3分の1のエコツアーを実施していて、飯能市エコツアーの実施を中核団体に頼る傾向が見られた。今後は、中核団体と他団体との連携を強化し、他の団体にも住民の参加する機会を増やすことができれば、エコツーリズムが健全に継続できると考えられる。

(2) 住民参加の継続

アンケート調査により、地域に関心度が高く、他団体との交流が多く、団体の経営も重視している住民の活動年数が長い傾向が示されたが、入会期間の短い会員はエコツアーを実施したい意欲が高く勉強、学習なども積極的に参加することが多い一方で、実際にメインガイドをやることが少なく、会員の意向とミスマッチがある可能性があることが分かった。また、会員の高齢化も深刻になり、今後の会の担い手を探し、後継者となる会員の育成が求められている。そこで、活動年数の違う会員の交流を促進し、新入会員にベテラン会員が持つ知識や技術を継承する対策が考えられる。

最後に、飯能市エコツーリズムを継続させるには、「市民ガイドの会」を中心にサポートしていた行政の業務を全体に分散させ、制度と審査の書類なども簡略し、行政の負担を減らす必要があると考えられ、

さらに、「市民ガイドの会」を他の実施団体の連絡機関として位置づけ、継続年数の違い団体と会員の経験と情報の共有を促進することが期待される(図17)。

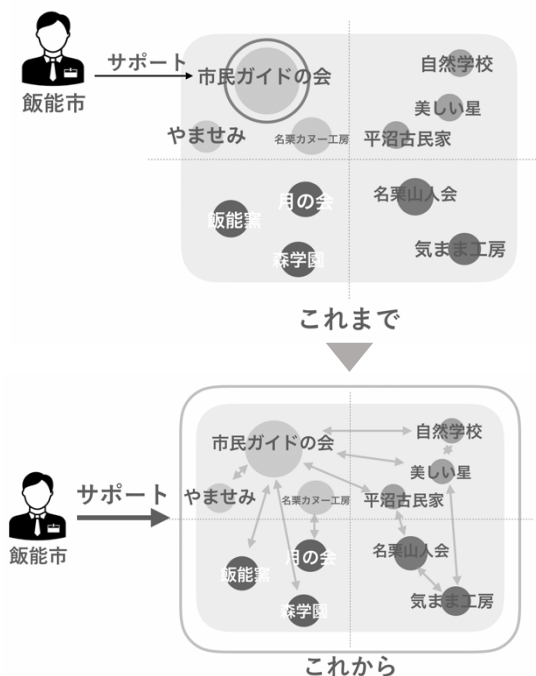


図17：今後の仕組みに対する提案

参考文献

- 1) 敷田麻実・森重昌之・新広昭・佐々木雅幸：エコツーリズムの発展と構造モデル、国立民族学博物館調査報告(23)、p.111-128、2001
- 2) 環境省：日本におけるエコツーリズムの取り組みについて、p.2、2011
- 3) 高梨洋一郎・真板昭夫：エコツーリズム推進法と地域興し、まちづくり(19)、p.47-50、2008
- 4) 敷田麻実：自立的観光から持続可能な地域を目指して：エコツーリズムという試み、大交流時代における観光創造(70)、p.75-96、2008
- 5) 海津ゆりえ：エコツーリズム推進への期待と課題に関する基礎的研究：「エコツーリズム推進全体構想」の分析から、文教大学国際学部紀要27(1)、p.1-17、2016
- 6) 山田二久次・大山翔子・松井隆宏：エコツアーの実施と地域の人々のつながり：一三重県鳥羽市を事例とした社会ネットワーク分析一、人間と環境42(2)、p.5-17、2016
- 7) 平井純子：里地里山型エコツーリズムの現状と今後への一私案—飯能市を事例に一、駿河台大学論叢(47)、p.169-186、2013
- 8) 平井純子：里地里山方エコツーリズムの行方—飯能市を事例に一、駿河台大学論叢(56)、p.83-94、2018
- 9) 中岡裕章：埼玉県飯能市におけるエコツーリズムの意義と問題点：エコツアー実施者の参画意識に着目して、地理学評論[Series A]91(2)、p.146-161、2018